

# 歌枕の喩性—和歌から散文へ

西山 秀人

## 1. はじめに

歌枕は本来、和歌に詠み込まれる歌語やそれを解説した手引書を指す語であったが、平安時代後期になると和歌によく詠まれる諸国の地名すなわち名所の意に用いられるようになった。今日、歌枕といえは後者の意に用いられるのが一般的であり、本稿もその立場に拠っている。片桐（1970）は後者すなわち「狭義の歌枕」が掛詞・縁語といった修辞表現と同様、古今集時代に成立をみたことを明快に論じたが、『古今集』以降、歌枕の用法が固定化するにつれ、散文でも歌枕の喩的機能に注目した独特の表現形式が編み出されていった。その典型といえるのが次節で取り上げる『枕草子』の地名類聚章段である。「山は」段の筆頭に挙げられている「小倉山」は、当時の貴族にとっては馴染み深い景勝地であったが、当地に続いて「貸せ」「笠」の語を連想させる「鹿背山」「三笠山」が挙げられていることを考慮すると、おそらくは「小倉山」—「暗（し）」という掛詞的興味が先行していよう。すなわち、「小倉山」「鹿背山」「三笠山」は「暗（し）」「貸せ」「笠」を被喩辞とする喩辞して捉えることも可能ではないだろうか。

地名類聚章段には和歌用例が現存しないようなユニークな地名も少なからず挙げられているが、こうした歌枕とは言い難い地名<sup>1)</sup>についても歌枕に準じた表現性を見出し、地名単体を喩辞とする捉えようとする表現手法は、もちろん『枕草子』の一特性として捉えることは十分可能であろう。ただ、平安時代の諸作品を改めて調査してみると、地名類聚段に見るような歌枕表現のあり様は、歌集の詞書や散文作品中にもまみ見出されることに留意しておく必要がある。中でも、後掲3節に挙げた『源氏物語』の例では歌枕が引歌表現の一環として用いられており、和歌にみる古歌摂取のあり方とはまた別の様相を呈している。本稿では散文表現の中で歌枕が喩辞としてどのような機能を果たしているのか、その背景的側面にも注目しながら考察を及ぼしてみたい。

## 2. 『枕草子』地名類聚章段にみる喩性

杉山（1975）は『枕草子』「一は」型類聚章段77段のうち、重複2段を含めた計23段を「地理地文に関するもの」と認定している。私見では「渡は」「駅は」および三卷本一類本には見えない「湯は」の3章段もこれに含めてもよいと考えるが、今は立ち入らなくておく。本稿では杉山（1975）が挙げた23段のうち、各地名の連想関係が比較的把握しやすい「山は」「里は」「関は」の三章段を取り上げ、各地名にみる比喩性について考

えてみたい。

まずは「山は」段から見ていこう。便宜上、各章段の掲出地名には丸数字で通し番号を付した。

- (a) 山は ①小倉山。②鹿背山。③三笠山。④このくれ山。⑤いりたちの山。⑥わすれずの山。⑦末の松山。⑧かたさり山こそ、いかならむとをかしけれ。⑨いつはた山。⑩かへる山。⑪のち瀬の山。⑫あさくら山、よそに見るぞをかしき。⑬おほひれ山もをかし。臨時の祭の舞人などの思ひ出でらるるなるべし。  
⑭三輪の山、をかし。⑮手向山。⑯まぢかね山。⑰たまさか山。⑱耳なし山。

(11段)

本段については地名間の連想性が再三指摘されているところであるが、本稿では諸先学の成果を踏まえながら各地名の特性を比喩的側面から捉えなおしてみたい。前引の三巻本では計18の地名が挙げられている。これら各地名から喚起される詞句や事象をたどっていくと、断片的にはあるが恋愛をモチーフとした物語が構成されているように見える。その解釈をめぐるには諸説あるが、名称への興味を主体に地名間の連想関係を想定してみると次のようになるうか。

①暗(し)、②貸せ、③笠 →空が暗いので笠を貸せ。

④この暮、⑤入り立つ、⑥忘れず、⑦愛情の誓い →この夕暮時に女のもとに入り込み、忘れまいと愛情の不変を誓う。

⑧片去る、⑨何時また、⑩帰る、⑪後の逢瀬、⑫よそに見る →遠慮する山とはどのような山なのかと思うと面白い。去っていった人は、いつまた都に帰るのか。後の逢瀬を期待していることだろう。だが、古歌にあるように「昔の恋人も今は他人」になりはしないか。「よそに見る」という発想が面白い。

⑬大比礼歌 →臨時祭の東遊が思い出される。

⑭三輪明神、⑮手向けの神 →「訪ねていらっしやい」と古歌に詠まれているのが面白い。道祖神に旅中安全を祈願しながら向かうことだろう。

⑯待ち兼ねる、⑰たまさか、⑱耳無し →逢瀬を待ちわびているのに、たまにしか訪れない。そのうち音沙汰もなくなり関係は途絶える。

⑦「末の松山」は「君をおきてあだし心をわがもたばす糸の松山浪もこえなむ」(古今・東歌・1093・不知)と詠まれるように、当地に浪が越えることは通常あり得ないとされ、それを証として愛情の不変を誓う比喩として用いられた。地名についての寸評は付されていないが、当地を詠み込んだ歌の多くが上掲古今集歌に依拠していることを踏まえれば、本段においても同様の発想のもとに掲出された可能性が強そうである。あるいは、鈴木(1988)が指摘するように「松山」―「待つ」の連想から「忘れず」に行く末を「待つ」という文脈を想定することもできよう。⑫「あさくら山」は寸評の内容から「むかし見し人をぞわれはよそに見しあさくら山の雲井はるかに」(夫木抄・雑二・8766・不知、「山、六帖」)を念頭に置いての掲出と推測される。当該歌は現存の『古今六帖』には見えないが、『夫木抄』の「六帖」の注記を信用すれば、かつては当該歌を

収めた『古今六帖』が存在していたと考えざるを得ない。⑬「おほひれ山」は東遊の際にうたわれた大比礼歌を念頭に置いての掲出であろう。ここは作者が宮中で実見した臨時祭の歌舞を想起しての記述であるため、前半に見る恋物語的な連想とは趣向を異にする。⑭「三輪の山」は三輪明神の御神詠とも伝えられた「わがいはほはみわの山もここひしくはとぶらひきませすぎたてるかど」(古今・雑下・982、不知)を踏まえ、「恋しければ訪ねていらっしやい」と詠んだことを「をかし」と評したか。そう考えると「三輪の山」は上掲歌の引歌と見なされ、「とぶらひきませ」の隠喩と捉えることもできよう。

かよふみやづかへ人のさととひおきてたづねけれど、さらにえあはで、のちに、「みわのやまもと」ときこえしはといへば

みわの山このゆくすゑはいかなればところどころにすぎたてりけむ(仲文集・67)に見る引歌表現と同様の手法である。

如上の考察より、「山は」段については地名から喚起されるイメージをもとに恋物語的な文脈を構成しようとした意図が看取されたかと思う。掲出された地名の多くは重義的に用いられており、それ以外の地名についても何らかの比喩性が認められよう。ただ、注意しておきたいのは、上述した連想性は三巻本の本文に限って指摘されるものであり、能因本ほか他系統本では事情を全く異にしている点である。本段の掲出地名の数だけを見ても能因本37、前田家本40、堺本25と三巻本を上回っており、その配列も冒頭の「小倉山」以外は相当の出入りがある。類聚章段を扱うとどうしてもこの問題がついて回るが、本稿ではこれ以上深入りせず、以下、三巻本に依拠しながら必要に応じて能因本を参酌することとしたい。

次の「里は」段は「山は」段よりも連想の道筋が明確である。

(b) 里は ①逢坂の里。②ながめの里。③寢覚の里。④人妻の里。⑤たのめの里。

⑥夕日の里。⑦つまとの里、人に取られたるにやあらむ、わがまうけたるにやあらむとをかし。⑧伏見の里。⑨あさがほの里。(60段)

地名から喚起される意味内容を追っていくと、①逢瀬を待ちわび②恋しくて物思いに耽り③夜も覚醒して眠れない、④人妻に⑤関係を期待させ⑥人恋しさがつのる夕暮時に⑦妻を取る(他の男に妻を盗まれたのか、自分が人妻を盗んだのか、そう思うと面白い)、⑧共寝をして⑨女の寝起きの顔を見る、と秘めた逢瀬の物語が浮かび上がってくる。

ところで、多門(2011)は「山は」「里は」両段について「列挙されるメンバからあるスクリプトが読み取れるという指摘がある」と項目間の連想性に言及した上で、「比喩の観点からいえば、メンバ間が換喩関係を結んでいる」とする。確かに、各地名が和歌という縁語のような関係を構成している場合は、地名間の換喩性を認めることも可能かと思われる。また、内田(1993)は「場所に関する認識や表現の方法を比喩という観点から捉えなおす過程において歌枕の換喩性に言及している<sup>2)</sup>。

歌枕の重義性や換喩性を援用しながら、地名の列挙のみで物語的な文脈を構成しよ

うとした類聚章段の試みは、やがて作者自らが連想の脈絡を説明するようになったことで徐々に散文的性格を帯びていくようになる。「関は」段はその過渡的状况を伝えていよう。

- (c) 関は ①逢坂。②須磨の関。③鈴鹿の関。④くきたの関。⑤白河の関。⑥衣の関。⑦ただごえの関は⑧はばかりの関にたとしへなくこそ覚ゆれ。⑨横はしりの関。⑩清見が関。⑪みるめの関。⑫よもよもの関こそ、いかに思ひ返したるならむと、いと知らまほしけれ。それを⑬なこそその関といふにやあらむ。逢坂などを、さて思ひ返したらむは、わびしかりなむかし。(107段)

「里は」段と同じく「逢坂」から始まるが、③・④が伊勢国、⑤・⑥・⑧・⑬が陸奥国、⑨・⑩が駿河国と部分的には地域的関連をうかがわせながらも名称への興味を主体とし、最後は「逢坂」に回帰している点、構成面への配慮が認められよう。注意すべきは⑦と⑧、⑫と⑬で、これらは地名から喚起される意味内容を隣接する地名のそれと比較しながら寸評を展開している点、随想化への萌芽が看取される。⑦の「ただごえ」はまっすぐ登り越える意、⑧の「はばかり」は遠慮、ためらいの意だが、本段では人事に引きつけて「ただごえ」は障害なく逢瀬をとげること、「はばかり」は逢瀬をためらうことを喩えていよう。⑫の「よもよも」は副詞「よも」の畳語だが、能因本、前田家本、堺本の一部伝本は「よしよし」(どうなってもよい意)とある。寸評との関係を考慮すると「よしよし」の方が落ち着きがよさそうではある。後文の「それをなこそその関といふにやあらむ」との関係からすれば、「えい、ままよ」と心変わりしたのは男であり、⑬は「来るな」と拒絶していることから女の立場を前提としたものと考えられよう。したがって、末文は逢瀬を目前にして男が突然心変わりがしたら、女はさぞかし辛いだろうと忖度したものと解しておきたい。比喩的には「逢坂の関」は逢瀬の換喩と見なし得るが、他の地名についても重義性がうかがわれるものは換喩と認めてもよいのではなかろうか。

以上、『枕草子』地名類聚章段の中から地名間の連想性が比較的把握しやすい3章段について考察を及ぼしてきた。「物尽し」というスタイルをとりながら、古今集時代に成立した歌枕の重義性や比喩性を効果的に用いることである種の物語的文脈を構成しようとした手法自体はユニークだといってよい。もっとも、その背景には、

- (d) 「さらば京にて」といへば、いほぬし、「おさふる袖の」といらふれば、「あなゆゆしや、後瀬の山に」などいひてたちぬ、……(増基法師集・13)  
(e) 「明後日ばかりは逢坂」とぞある。(蜻蛉日記・上)  
(f) 「ただおのづから思ひ出で聞こえたまひてむ。わたくしにも『声ばかりこそ』とは聞きたまはずや」と言ふ。〈あこぎなりけり。この殿にこそありけれ〉と思ひて、『ふるの都』をば忘れたまひけるなめれば、何かは知りげにも聞こえはべらむ。……」(落窪物語・巻三)

のように、日常会話の中でごく自然に歌枕表現が用いられていたことにも留意したい。

(d) は「山は」段にも見える「後瀬の山」を「後にまた逢おう」の意の挨拶表現として用

いている。(e)は兼家が道綱母に逢いに行くことを「逢坂」と表現した洒落である。(f)は「いそのかみふるき宮この(異本「ふるのみやこの」)<sup>3)</sup>」郭公声ばかりこそむかしなりけれ(古今集・夏・144・素性)に依拠した会話の応酬で用いられている。

このように会話文中に出現する引歌や歌枕表現をヒントとして、地名間の連想関係を構成していった可能性がうかがわれる点に『枕草子』地名類聚章段の特質が認められよう。もちろん、類聚章段に掲出された地名すべてが比喻だと認定できるわけではないが、「テキストの背後に、比喻のかたちにならなかった比喻的思考の多様な存在があったということに留意すべきである」という多門(2006)の指摘は、類聚章段の比喻性を考えていく上で有効な示唆となり得よう。

ところで、(d)～(f)に挙げた会話文中の地名表現は『源氏物語』に至るとより重層性を帯びていくことになる。次節では『源氏物語』に登場する地名のうち、会話文中の引歌に登場するものに焦点をあてて考察してみたい。

### 3. 歌枕表現による引歌—『源氏物語』にみる

『日本語歴史コーパス』で『源氏物語』の地名を検索すると重出を含め733例<sup>4)</sup>が検出される。ただし、後述する「いさら川」に関しては当該コーパスでは普通名詞として扱われている。ちなみに、「いさら川」の原態と思しき「いさや川」については『和歌童蒙抄』『袖中抄』が所在を近江とする。ここでは「いさら川」を「いさや川」の転化と見なし、地名として扱うこととしたい。前節で示した『枕草子』の考察結果を踏まえ、本稿では会話文中の地名169例のうち、鈴木(2013)の分類でいうところの「作中人物の言う言葉(対話や消息など)にふまえられた」引歌を中心に検討してみたい。

まずは「いさら川」の例を挙げる。

- (a) 言ふかひなくて、いとまめやかに怨じきこえて出でたまふも、いと若々しき心地したまへば、〔源氏〕「いとかく世の例になりぬべきありさま漏らしたまふなよ、ゆめゆめ。いさら川なども馴れ馴れしや」とて、切にうちささめき語らひたまへど、何ごとにかあらむ。(朝顔巻)

光源氏は朝顔の姫君に対して真剣に恋情を訴えたものの、朝顔は源氏を受け入れようとしなかった。夜もたいそう更けたので、源氏は恨み言を言いながら立ち去ろうとするが、その際に朝顔付きの侍女に対して固く口止めしながら何やら囁いている場面である。傍線部「いさら川」は上述したように近江国犬上郡の地名「いさや川」が転化したものと推測されるが、ここでは、

- ①いぬがみやとこの山なるいさらがはいさとこたへてわがなもらすな

(古今六帖・五・3061・あめのみかど)

の引歌として用いられている。①は『古今集』に「いぬがみのとこの山なるなとり河いさとこたへよわがなもらすな」(墨滅歌・1108・巻十三・652の次)として載るが、第三句は定家本系が「なとり河」「いさや川」であるのに対し、元永本・卷子本は「いさらかは」と揺れが見られる。もっとも、①は「犬上の鳥籠の山なる不知哉川いさとを聞こ

せ我が名告らすな」(万葉・巻十一・寄物陳思・2710)を原歌としており、伝誦・書承の過程で複数の派生本文が生まれたものと推測される。

さて、傍線部は末句「わがなもらすな」の意を込めたもので、波線部「いとかく……漏らしたまふなよ」と呼応する。比喩の観点から見れば、他言無用の隠喩という見方もできようか。加えて、「いさら川」が①をはじめ、

②うしとだにいふもさらなりいさら川いさやいかなるわが身なるらん(長能集・44)のように「いさ」(相手の言葉を軽く否定し受け流す意)を引き出す序詞を構成していることを勘案すると、(a)の「いさら川」には「いさ」の意が暗示されている可能性も否定できない。そのように考えた場合、「いさら川」は「いさ」の換喩としての機能も担っているといえそうである。

なお、後接する「馴れ馴れしや」は、本来ならば実事の後に口止めすべきところ、朝顔とはそのような間柄ではないことから、引歌としてはぶしつけだったという源氏自身の謙遜が含まれていよう。源氏としては箝口令を徹底させるためには侍女を籠絡しておくのが効果的だと考えたのであろう。主家である朝顔を立てようと、あえて耳障りのよい言葉を選んでいようにも見える。

ところで、『源氏物語』では①を本歌とした引歌が他にも散見される。以下の例は第二句「とこの山」を用いた例である。

(b) 人間にさし寄りて、〔頭中将〕「もの隠しは懲りぬらむかし」とて、いとねたげなる後目なり。〔源氏〕「などでかさしもあらむ。立ちながら帰りけむ人こそいとほしけれ。まことは、うしや世の中よ」と言ひ合はせて、「とこの山なる」と、かたみに口がたむ。(紅葉賀巻)

源氏が源典侍と一夜を過ごしていた折、頭中将が忍び込み典侍を脅すが、源氏は頭中将の悪戯であることに気づき、二人してしどけない姿になるまでふざけ合った。その翌日、昨晚の一件をめぐる源氏と頭中将が冗談を言い交わしながら、このことはお互い秘密にしようと約束するのが上記の場面である。

傍線部「とこの山なる」も上掲①の引歌表現だが、(a)とは異なり第二句を本文に引いている。「鳥籠の山」は近江国犬上郡の地名で、和歌においては地名に「床」を掛け、その縁で「寝」「枕」「伏す」などの語とともに詠まれることが多い。平安後期以前の用例は乏しいが、能因本枕草子の「山は」段に「床の山は、「わが名もらすな」と御門のよませたまひけむ、いとをかし」とあることには注意される。

「いさら川」と同様、本例についても「とこの山」は他言無用の隠喩としての機能を担っているが、地名に「床」(臥所)を響かせ、源典侍との戯れの恋を暗示していることから、多門(2006)がいうところの「換喩と隠喩の複合タイプ」とみることにも可能かと思われる。先述した『枕草子』の例と比較すると、より重層的な表現が構築されている。

それに対して、次の二例は表現的にいささかひねりが足りないようにも感じられる。本論の趣旨からは離れるが、参考までに触れておきたい。



(c) 〔源氏〕「いまさらにかひなきことによりて、わが名もらすな」と口がためたまひしを憚りきこえて、尋ねてもおとづれきこえざりしほどに……(玉鬘巻)

(d) 宮も、「これはまた誰ぞ。わが名もらすなよ」と口かためたまふを、いとめでたしと思ひきこえたり。(浮舟巻)

(c) は夕顔の乳母子、右近が夕顔の娘(玉鬘)を心かけながらも源氏から口封じされていたため、音信不通のままであったことが明らかにされる場面、(4) は宇治を訪れた匂宮が浮舟を隠れ家に連れ出し、侍女の侍従らに口止めする場面である。両例とも①の結句をそのまま引いてきたという体である。尾崎(1978)は上掲(d)について、「殆ど内容的にはその表現自体で充足し、引歌性はその表現によって(中略)歌の有する全体的な余韻、気品を並行的に表現するもの」とするが、むしろ話者の源氏・匂宮が相手の教養レベルに配慮し、あえて本歌①を知らなくても意が通じるような表現を用いたと解すべきであろう。

以上、①「いぬがみやとこの山なる…」に依拠した引歌について検討してきた。末澤(2019) 他が指摘するように、『源氏物語』では同じ歌が引歌として繰り返し用いられている例は少なくないが、当該歌のように異なった三句から引かれている例は珍しい。(a) で源氏は「とこの山」を引かなかったのは、朝顔とは一線を越えていないことを考慮し、「床」を連想させる本地名を避けたものと思われる。他言無用の喩辞として用いるならば、この状況だと「いさら川」が最も無難な表現ということになろう。朝顔の姫君は教養豊かな女性であり、彼女に仕える侍女たちまた相応の資質を備えていたことを見越した上で、源氏は「いさら川」を挙げたのではなからうか。また、該句を引くことで、第四句「いさとこたへて(よ)」が連想しやすくなるという意図も汲み取れよう。(b) は相手が気のおけない頭中将であることから遠慮なく「とこの山」を引いたものとみられる。(c)・(d) は「中の品」の女に属する夕顔・浮舟付きの侍女らに対しての発言であるため、あえて平易な表現を用いたのではなからうか。このように同一歌であっても現場の状況や相手の身分、教養に配慮した詞句を選択するという配慮は、比喩の観点から見ても興味深いものがある。

次の二例は地名から引歌を看破した上での応酬である。

(e) 〔空蟬〕「うけたまはり悩むを、言に出でてはえこそ、

問はぬをもなどかと問はでほどふるにいかばかりかは思ひ乱る

益田はまことになむ」と聞こえたり。めづらしきに、これもあはれ忘れたまはず、

〔源氏〕「生けるかひなきや、誰が言はましごとにか、

うつせみの世はうきものと知りにしをまた言の葉にかかる命よ

はかなしや」と、御手もうちななかるるに、乱れ書きたまへるいとうつくしげなり。(夕顔巻)

(f) 八月十余日のほどに、小鷹狩のついでにおはしたり。例の、尼呼び出でて、「一目見しより、静心なくてなむ」とのたまへり。答へたまふべくもあらねば、尼君、「待乳の山のとなん見たまふる」と言ひ出だしたまふ。(中略)

客人は、[中将]「いづら。あな心憂。秋を契れるは、すかしたまふにこそありけれ」  
など、恨みつつ、

松虫の声をたづねて来つれどもまた萩原の露にまどひぬ(手習巻)

(e) は夫に従って伊予に下向することになった空蟬が心細さから源氏に文を贈り、歌を詠み交わす場面である。傍線部「益田」は空蟬、波線部「生けるかひなきや」は源氏による引歌だが、ともに

③ねぬなはのくるしかるらん人よりも我ぞます田のいけるかひなき

(拾遺・恋四・894・不知)

を本歌とする。「益田の池」は大和国高市郡に設けられた池で、天長2年(825)の完成と伝えられる。和歌では「ぬなは(蓴菜)」が景物として詠まれるほか、地名に「増す」を掛けたり、「ぬなは」の縁で「繰る」―「来る」「苦し」の掛詞や「絶ゆ」「乱る」などの縁語が用いられたりした。「益田」は③の「生けるかひなき」の隠喩として機能しているが、第二句「くるしかるらん」を踏まえ、苦悩が「増す」意も響かせていよう。とすれば、「益田」は隠喩であるとともに、苦悩が増すことの換喩ということになる。一方、源氏は即座に本歌を看破し、「生きている甲斐がないのはむしろ自分のほうだ」と応酬する、

(f) は小野の妹尼の亡き娘の婿、中将が浮舟をかいま見て心惹かれ、八月十日過ぎ、小鷹狩にかこつけて三度目の訪問をする場面である。浮舟は返答もしないので妹尼が応対するが、しびれを切らした中将は妹尼にくどくどと恨み言を言う。傍線部「待乳の山の」は妹尼、「秋を契れる」は中将による引歌だが、両者とも、

④たれをかもまつちの山の女郎花秋とちぎれる人ぞ有るらし(小町集・98)

を本歌とする。「待乳の山」は大和・紀伊の国境に位置する山で、平安以降はその名にちなんで「待つ」を掛けて詠まれることが多かった。④についても同様に、「女郎花」に女性をなぞらえ、秋が来たら逢おうと約束した男を待ちわびる女の姿を描出している。(f)の傍線部は④の下二句の意を暗示させることで、「契りを交わした人は他にいない」ということを中将にほのめかしたものだ、波線部は妹尼の言葉を逆手に取り、「秋になったら逢える」という約束を反故にするのかと訴えている。比喩的に見れば「まつちの山」は④の下句の隠喩となっているが、同時に「待つ」の換喩としても機能していよう。

以上、『源氏物語』に登場する地名のうち、会話文中の引歌に登場するものをいくつか取り上げてきた。表現としては歌枕の換喩性に引歌の隠喩性に加わることで、より重層的な文脈が構築されていることが看取されたかと思う。このような手法は、例えば『古今集』の「世中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせになる」(古今・雑上・933・不知)を踏まえた、

(g) 桂川、月の明きにぞわたる。人々のいはく、「この川、飛鳥川にあらねば、瀬瀬  
さらに変はらざりけり」といひて……(土佐日記、二月十六日)

のような表層的な引用とは一線を画していよう。如上の表現特性は会話文のみならず地の文においても同様に指摘されるが、この問題については稿を改めて検討したい。



#### 4. おわりに

本稿では『枕草子』地名類聚章段と『源氏物語』の引歌に焦点を絞り、散文表現の中で歌枕が喩辞としてどのように機能しているかについて考察を加えてきた。その結論の一端は第2節・第3節の終わりに述べてきたところであるが、古今集時代に一応の完成を見た歌枕が和歌以外のコンテキストの中に流用されることで、その比喩性を徐々に強めていくこととなったのは実に興味深い。両作品の歌枕表現を同じ俎上に載せて論じるのは適切ではないという向きもあるが、『枕草子』に関しては、

(h) 「いみじくはかなき事にもなぐさむなるかな。姨捨山の月は、いかなる人の見けるにか」など笑はせたまふ。(259段・「御前にて人々ども」)

→わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て

(古今・雑上・878・不知)

(i) 院の御棧敷より、「ちかの塩釜」などいふ御消息まゐりかよふ。

(260段・「関白殿、二月二十一日に、法興院の」)

→みちのくのちかのしほがまちかながらはるけくのみもおもほゆるかな

(古今六帖・三・しほがま・1799)

→「棧敷は近いのにお会いできない」という趣旨の贈答があったことを表す。

など、地名類聚段以外の地名を対象に加えたとしても、『源氏物語』の重層性に匹敵するだけの用例は見出せないようである。先行する散文作品において種々の試みがなされてきた歌枕表現ではあるが、比喩の観点からすれば『源氏物語』において一応の完成を見たのではないかと考えたくなる。甚だ乱暴な見通しではあるが、今後は歌枕以外の比喩表現にも目配りしながら検討を進めていきたい。

#### 注

- 1) 奥村(1989)が指摘しているように、「歌枕は正統の文学に使用された地名」という認識に立てば、例えば「山は」段の「かたさり山」や「里は」段の「夕日の里」のように現存の和歌用例を持たない地名は、歌枕の範疇には含まれないということになる。本稿では和歌用例が探せない地名であっても、重義性が認められたり特定の景物・イメージを伴ったりしている場合は歌枕として扱った。
- 2) 内田(1993)は文学作品の題材に取り上げられた歌枕が「全てその場所が持っていた特徴に着目して地名とイメージが結び付けられたものであり、まさしく換喩的認識に依って作られているのである」と指摘する。なお、阿部(1991)は枕詞と歌枕の提喩性を指摘するが、中村(1977)、内田(1993)が指摘するように提喩と換喩を明確に区別することは困難であろう。本稿では「換喩的認識と隠喩的認識の解釈を少し広げれば、提喩的認識を包含させることができる」とする内田(1993)の見解を踏まえ、〈逢坂―逢瀬〉のように重義性が認められる例を換喩、〈末の松山―愛情の不変を誓う〉のように特定の事象を喩えた例を隠喩と見なすこととする。

- 3) 永治二年清輔本、天理図書館増本、飛鳥井雅経筆本は「ふるのみやこの」とする。唐紙本素性集(『新編私家集大成』素性Ⅱ)も「ふるのみやこの」。
- 4) 検索条件は「品詞」の「小分類」が「名詞-固有名詞-地名-一般」。

#### 【資料】

- ・ 散文＝『新編日本古典文学全集』小学館に拠る。ただし、『枕草子』能因本は松尾聰・永井和子(2008)『枕草子 能因本』笠間書院、前田家本は田中重太郎(1951)『前田家本枕冊子新註』古典文庫、堺本は速水博司(1990)『堺本枕草子評釈』有朋堂に拠る。
- ・ 和歌＝断りのない限り『新編国歌大観』角川書店(「日本文学web図書館」古典ライブラリー所収)、『万葉集』は『新編日本古典文学全集』に拠り、一部表記を改めた。『古今集』の校異は西下経一・滝沢貞夫(1977)『古今集校本』笠間書院を参照した。

#### 【参考文献】

- ・ 阿部好臣(1991)「喩と心象風景―柏木の猫」『国文学 解釈と教材の研究』36巻10号、阿部(2011)『物語文学組成論Ⅰ』笠間書院所収
- ・ 内田順文(1993)「比喩的認識と場所イメージ」『国士舘大学文学部人文学会紀要』26号
- ・ 奥村恒哉(1989)「歌枕序説―起源と前史」『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』40号、奥村(1995)『歌枕考』筑摩書房所収
- ・ 尾崎知光(1978)『源氏物語私読抄』笠間書院
- ・ 片桐洋一(1970)「歌枕の成立」『国語と国文学』47巻4号、片桐(1991)『古今和歌集の研究』明治書院所収
- ・ 国立国語研究所(2016)『日本語歴史コーパス 平安時代編Ⅰ 仮名文学』<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html#kanabungaku>(2022年8月29日確認)
- ・ 末澤明子(2019)『王朝物語の表現生成―源氏物語と周辺の文学』新典社
- ・ 杉山重行(1975)「枕草子の類聚的章段」『枕草子講座』第1巻 有精堂所収
- ・ 鈴木日出男(1988)「歌枕の本性」『太田善麿先生古稀記念 国語国文学論叢 続群書類従完成会』鈴木(1991)『古代和歌史論』東京大学出版会所収
- ・ 多門靖容(2006)『比喩表現論』風間書房
- ・ 多門靖容(2011)「類聚章段の思考」『表現研究』94号、多門(2014)『比喩論』風間書房所収
- ・ 中村明(1977)『比喩表現辞典』角川書店

[付記] 本稿校正時に、はんざわかんいち『「枕草子」決めの一文』(新典社)、半沢幹一『古代歌喩表現史』(笠間書院)が刊行された。示唆に富む指摘が多くなされているが、本稿ではそれらに言及することができなかった。今後の資としたい。

(日本大学)